

# 金谷山さくら回廊

金谷山桜千本の会会員 金井建一

「ふるさと」は遠きにおいて思ふもの」

このフレーズは、大正七年に上梓された室生犀星の名詩集、「抒情小曲集」の序詩の一行である。犀星の古里は金沢だが、彼が遠きにおいて古里を思ふとき、心底にいつも犀川がよみがえって来たという。上越の出身者が、遠きにおいて古里を思ふとき、その犀川にあたるのが、高田城址の桜ではなからうか。残雪の中の桜並木、その根幹にみえる厳冬のなごり、春を孕んだような薄紅のつぼみ、夜の間に音もなく散っていく桜吹雪、そして葉桜というように。いつまでも桜へと思いは流れてゆく。

一昨年の秋だったか、高田図書館の入口で偶然、高校時代の同級生の石黒さんに出会った。久しぶりの再会だということに、いきなり桜の話ではないか。それも

金谷山の一角を桜の山に変えたいなどという、夢想だにしなかった話だ。呆気にとられた私の脳裏に、あの異彩、佐藤良二氏がすべりこんできた。

この名は十余年まえの新聞で知った。公共広告機構による特大の広告が、氏の業績を詩のかたちで伝えていた。業績とは、独力で挑んだ桜街道づくりのことである。富山湾に注ぐ庄川から、伊勢湾に流れ込んでいる長良川の下流までの二百六十キロの沿道に、桜街道をつくらうとしたのだ。氏は国鉄バスの車掌だった。その氏がある日、卒然と想い定めたのがこの遠大な計画だったのだ。少ない休暇と私財を投じて、独力で二千本近くの桜木を植えた氏は、突然、病に倒れた。四十七歳の生涯だった。国鉄の民営化は昭和六十二年のことだから、それより前のこ

とになる。

「金谷山さくら千本の会」を立ち上げたメンバーは四人である。石黒さんがそのおひとりであることも、会員百数十名にも拡大した会の事務局を担っておられることも知ったのは、しばらく後のことだった。

金谷山のレルヒの丘を山側へ下ると、整備された広場があつて、いつも親子連れで賑わっている。その東側斜面右手のボブスレー場と、左手のベルリン坂に挟まれた二・五ヘクタールが桜の植樹場所である。ここは市有地ではない。けれど、桜の植樹構想をもちかけた会に、地権者の方々は、即応のかたちで賛同してくださったと聞く。まさにやわらかな越後びとである。

植樹地は、コナラやマンサクが目立つ雑木林で、自生のウズミ桜も混ざってはいはるが荒れ放題の様相を呈していて、果たしてこんなところに桜木が活着するのか不安であつた。これも後で知ったことだが、会の中心になっておられる相澤（紀）さんは、数少ない樹木医ではないか。私の不安など最初から杞憂であつたのだ。相澤さんが選ばれたのは、山桜であつ



た。山桜は微紅色の五弁花である。水上勉の名作「桜守」のモデルとなった桜研究の泰斗、笹部新太郎氏は、桜の九割を占める染井を「あれは花はつかりで気品にかけますわ」と嫌った。

相澤さんが、なぜ山桜を選ばれたかについては、直接伺ったことはないが、植樹されたばかりの山桜を見る度に「桜守」の世界が心底をかすめていく。山桜は開花時期が遅い。城址が桜吹雪につつまれる頃、金谷のさくら回廊が、ようやく色づき始めることになる。

この蠱惑的な時間差がうれしい。平成十四年十月の、わずか十本の山桜

の植え込みから出発した植樹は、平成十六年の第三回植樹で都合、ヤマザクラ六十本、オオヤマザクラ八十本にもなった。カスミザクラやエドヒガンザクラもそれぞれ十本植えられたが、こちらの桜は、どんな花を見せてくれるのか。

相澤さんは、「ここを「さくら回廊」となづけられたが、樹木医の目には、すでにその回廊の正確な姿が見えているのだろう。

桜以外にも、ブナの木や、真紅の紅葉木となるメグスリノキも混植されたが、これらの木々も回廊にいろどりを添えることになる。

会の定例作業活動は月一回、毎回ほぼ二十人前後の参加者だが、作業の大半は植樹ではなく、植樹まえの整備作業の方に費やされることが多い。まさに大変な植樹地で、また植樹が始まったばかりだというのに、すでに補植の必要となった箇所も多い。第二回の植樹地となった急坂などもそのひとつだが、やがては急坂にかしく桜木から、清冽な花吹雪が漂い始めることになる。

さくら回廊の来し方はどこなのか。

御母衣タムの湖底に沈むはずだった、樹齢四百年もの巨桜、その移植を成功させた桜守の偉人、笹部氏。そのあり方に

触発され出立した佐藤氏の、途方もない桜街道づくり。金谷山のさくら回廊もまた、かの地からの飛び火に違いない。そしていずれの日にか、この回廊も次代に受け継がれ、おそらくは延長の運命をたどるのではあるまいか。

九月の末、急坂の一本が季節外れの花をつけていると聞いた。行ってみると、黄昏の淡い光の中に、まだわずかばかり、花が散り残っていた。十歩ほど下ったミソソバの群生した斜面で見上げていると、足元に澄んだ水音がした。表出した伏流水が、三十センチほどの窪み状の段差を滴り、細流となっている音だった。

帰路、レルヒの丘でさくら回廊を遠望してみた。その高台から眺めたのは初めてだった。回廊はすぐに目に入ってきた。広場を挟んだ真向かいの山の目の高さの斜面の一角、そこがさくら回廊だった。雑木が切り払われている。そこだけが、斜陽を受けてかすかに明るんでいたのだ。まるで落陽をはいじて、淡くひかる山上湖のように見えた。

